

はじめに

2014年度に開催した計8回の研究会のうち、5月と11月の2回は、海外の研究者を招いてのゲスト研究会として開催された。これは、2014年度の研究活動の中でも特筆すべきものであると思う。

1人目のゲストは、オーストリアのウィーン大学教授 **Wolfram Manzenreiter** 氏である。研究会の第1部は、博士課程の大学院生3名によるプレゼンテーションとし、富田幸祐が極東選手権大会におけるインド国旗掲揚問題について、黒須朱莉がIOCにおける国旗国歌廃止をめぐる議論について、鈴木楓太が日本のアジア・太平洋戦争期におけるスポーツとジェンダーの関係について、それぞれ英語で報告し、**Manzenreiter** 氏よりコメントをいただいた。自分の研究を英語で伝えようとする院生たちのひたむきな姿とそれに対し、的確なコメントをくり出し、また一人ひとりに親身になってアドバイスをする **Manzenreiter** 氏の姿（それは懇親会の場でも続いた）が印象的で、感銘を受けた。

第2部では、**Manzenreiter** 氏に「日本におけるスポーツとボディ・ポリティクス——文化的グローバリゼーションの複合的方法による研究」というテーマで特別講義をしていただいた。メインタイトルは、自身の著書のタイトルと同じで、内容は同書で用いられた多様な方法論の紹介を中心としたものであった。著書一冊分の濃縮ジュースとでも言ったらいいだろうか、栄養価の高さは言うに及ばず、その包括性や明快さは見事としか言いようがない。まさに院生向けの講義のお手本であり、フーコーやブルデュー理論の応用など数々の刺激に満ちあふれていた。

2人目のゲストは、ノルウェーのモルデ大学 **Business Administration and Social Sciences** 学部教授 **Harald Dolles** 氏である。最初に **International Master's Programme** の「スポーツマネジメント」について紹介していただいたが、パワーポイントによる映像を駆使したプレゼンテーションのあまりの完成度の高さにまず驚かされた。その具体的なカリキュラムや科目の内容、教員スタッフなどの紹介は、それ自身が重要な参考材料であるだけでなく、日本における大学院教育のあり方を再考させる、そんなパワーをもっていた。教育に関しても海外と交流をもつことの意義はやはり大きい。

Dolles 氏の講演は、「スポーツ、ビジネスとマネジメント——研究の過去と未来」。その内容は、自身の編著をベースにした包括的なもので、ヨーロッパにおけるスポーツ・マネジメント研究の歴史、各分野の研究の概要、そして最先端の研究の紹介を柱としたものであった。当該分野の研究蓄積を明確かつ詳細に知ることができる、これまた見事な講演である。私にとって最も印象的だったのは、スポーツ・マネジメント研究が、企業やプロスポーツ組織、消費者だけでなく、政府や自治体、市民、住民をも対象とした総合的なものであるということだ。認識を一新させられた。

お2人の特別講義および講演は、その後ご本人にお願いして文章化していただき、本巻に収録した。ハードな日程の中、私たちのリクエストに応じて寄稿までお引き受けくださったお2人に感謝申し上げるとともに、仲介の労をとり、今回の企画を実現へと導いた中澤篤史、中村英仁の2人のスタッフにもお礼を申し上げたい。

2015年11月24日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 坂上 康博